

【5篇の構造】

A 朝明けに神を呼び求める祈り	1-3節
B 神は邪悪な者を滅ぼし忌み嫌う	4-6節
C 神への礼拝	7-8節
B' 悪しき者の拒絶を求める祈り	9-10節
A' 神の保護を求める祈り	11-12節

交差並行法の詩形が見られる。7-8節が詩の中心に当たる。

1. 朝明けに神を呼び求める祈り 1-3節

1-2「私のことば」「私のうめき」「私の叫ぶ声」

- ・苦しみの度合いが段階的に深まる表現が使われている。

3「朝明けに」

- ・この詩篇はダビデの朝の祈りのとき。
 - ・ダビデは朝からうめき、叫んでいた。ダビデを迫害する敵対者のことを考えると、ダビデは心穏やかではいられなかった。朝から、主の御前に叫ばずにはいられなかった。
- 私たちも気になる悩みがあるとき、一日中そのことが頭から離れないことがある。

3「私はあなたの御前に備えをし」

- ・「御前に備える」ことをいけにえと理解して、ダビデの公的な礼拝と理解されることもあるが、ダビデの私的な礼拝とし理解することも可能。いけにえに関する示唆が他にないことから、ダビデの私的な礼拝（祈り）と考える方が自然か。

3「仰ぎ望みます」

- ・直訳「見張る」（創世記31:49、IIサムエル13:34、II列王記9:17）
- ダビデは神が彼の祈りの言葉に答えてくださるのを、城壁の見張りが仲間の帰還を待つかのよう、今か今かと待っている。

2. 悪を憎む神 4-6節

- ・ダビデは一般論を言っているのではない。現実にはダビデの命を狙う人々に付け狙われる中で、このように告白している。ダビデは自分に言い聞かせるように神は悪を喜ばず、悪を行う者を滅ぼされ、忌み嫌われると告白する。神が守ってくださるはずだと信じ、告白する。

3. 主を恐れ、主の御前にひれ伏す 7-8節

〈7節〉

- ・ダビデは敵対者と違い、自分は聖なる宮に向かって主にひれ伏すと告白する。神を恐れる者であると。

8「私の前に あなたの道をまっすぐにしてください」

- ・主が備えられた道を歩ませて欲しいと願う。自分としてはどこを歩けば安全なのかもはやわからない。逃げる者の心境がよく現れた表現である。

4. 悪しき者の拒絶を求める祈り 9-10節

〈ローマ3章13節で引用〉9節

Rom. 3:13 「彼らの喉は開いた墓。

彼らはその舌で欺く。」

「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」

- ・パウロは神を離れた人間の姿を描写するのにこの節を引用している

↓

- ・ダビデの敵とは、ローマ書の視点を含めると、神を離れた人間に一般化される。

↓

- ・敵対者とは、ダビデに対してだけでなく、ダビデの背後にいる神に対しても敵対している。

↓

・詩篇5篇を読む時、ダビデに自らを重ねて、神に保護を求める祈りとして読み取ることが一般的だが、敵対者の側に自らを置き、自己吟味、赦しや救いを願う祈りとしての面ももっている。

10 「彼らが自分のはかりごとで倒れますように」

・これが何を指すのかは、この箇所だけでは明らかではないが、ダビデが息子アブサロムに追われていたときの状況に重なるところがある。新改訳の索引もその出来事を挙げている。ちなみに詩篇3篇はアブサロムから逃れた時とはっきりと記されている。4,5篇も同じ背景の中で歌われていると指摘する研究者もいる。

2Sam. 15:31 そのときダビデは、「アヒトフェルがアブサロムの謀反に荷担している」と知らされた。ダビデは言った。「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」

2Sam. 17:14 アブサロムとイスラエルの人々はみな言った。「アルキ人フシャイの助言は、アヒトフェルの助言よりも良い。」これは、主がアブサロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めておられたからである。

2Sam. 17:23 アヒトフェルは、自分の助言が実行されないのを見ると、ろばに鞍を置いて自分の町の家に帰り、家を整理して首をくくって死んだ。彼は彼の父の墓に葬られた。

アヒトフェルはアブサロム側についた預言者であり、ダビデはアヒトフェルの助言が受け入れられないようにと願った。主はそれを聞き入れ、彼の助言は退けられ、その後、アヒトフェルは自ら命を絶った。まさにアヒトフェルは「自分のはかりごとで倒れた」のである。神に油注がれたダビデに楯突くことは、ダビデを任命した主なる神に逆らうことであった。

5. 神の保護を求める祈り 11-12節

「大盾」

・ダビデの体全体を覆うほどの大きな盾のように、いつくしみでダビデを覆ってくださるという信仰。